

「現代居合道についての武術的考察」

平成9年1月25日

石田泰史（無双直伝英信流）

〈序...居合に何を求めるのか〉

居合道とは一体何であるか.....もっとも単純な疑問ではあるが、これは居合を学ぶものにとって、避けては通れない命題であろう。

武道か、武術か、芸術か。スポーツか、娯楽か、精神修養か。

その答えは居合の世界にいる各人の意識の中にあり、決して一様ではないだろうが、ここでは「居合＝武術」という認識にこだわって、以下に論を進めてみたい。

今日、一般に普及している居合道の多くは、それぞれに独自の技術・理合はあるものの、「武術」というフィルターを通して見ると「形骸化」という最も大きな問題が共通して浮かび上がってくるのではないだろうか。

「形骸化」という言葉が批判的すぎるとすれば、「様式美にかたよった」とでも言えばよい（このようなことは、すでに江戸時代から言われていたらしいが）。

いずれにしても相手のない「型」の世界は、ともすると独善に陥りやすく、また見られることを前提とした演武になりやすいものである(演武という言葉にも問題があるか?)。私の学ぶ「無双直伝英信流」は同系統の「夢想神伝流」と並び、居合道としては修行者が非常に多い流派の一つであると言われている。両者を併せると居合人口のかなりの割合を占めるに違いない。

古武道の普及、文化としての継承という意味では、人員の拡大も確かに必要であろうが、一方技術や術理の研鑽という面においては、人数の多さがかえって妨げになることも考えられる。実際に、同じ英信流でありながら、地域や道場によって理合の解釈が異なる技をよく見かける。

本来同流派であれば、表面的には多少の差異はあっても、術理に関しては同じでなくてはならないはずである。その術理が体現できるかどうかは個人の資質によるだろうが、その理論さえ正しく伝承され、指導されていれば、動きの本質を体得できる人間が少なからず育つに違いない。

しかしながら、広く普及している英信流の技に、一般的に言われる集中力・芸術性などを感じることはあっても、武術としての本質的な動きや理論を見ることは、めったにない（私の狭い見聞の範囲においてだが）。

古来より武術は、一子相伝に近い形であってはじめて、その技術・精神共に精妙な技を正しく伝えることを可能にしてきたはずである。また、それだけデリケートなものでなければ「術」とはなり得ないのであろう。

人員の拡大によって、裾野が広がり大きな山となった現代の居合道だが、それゆえに微妙なバランスを要する「術」の世界に立ち続けることが困難となり、次第に「形骸化」という安住の地に落ち着くことになった。繁栄と衰退が同時に進むというのは、皮肉なことである。

余談になるが、以前知り合いになったイギリス人とアメリカ人の男性に英信流の演武を見せた折、二人の口から「JAPANESE SWORD ART」という表現が出た。そのとき、この「ART」の一語について胸に引っ掛かるものがあり、どう解釈すればよいのかと迷ってしまった。「武芸」とでも訳せばある程度納得もできるが、それこそ「演舞」のようにしか映らなかったのではないかと、この思いに悩んだものである。

ARTという言葉には、芸術・技術の両方の意味を含め、使い方によっていろんなニュアンスが含まれるようだが、居合道を考えるには興味深いキーワードと言えるかもしれない。

余談のついでだが、以前空手の競技会において「型の部」で優勝した女子選手がインタビューに答え、「型の演武は人に見られるものだから、表情の出し方や化粧などにも気を付けて…」というようなことを言っているのを聞いたことがある。ここまでくると（武術としては）もはや救いようがない。

今日普及している「武道」の多くは、剣道・柔道に代表されるように、スポーツの範疇のものである。多人数が同時進行で学ぶことによって自然と競技化、スポーツ化したという見方もあるようだ。何にしても古来の武術とは一線を画するものである。

英信流に限って言えば、土佐の地に永く育まれた術が全国に広がるきっかけを作ったのは、剣道家たちであった。現在伝えられている英信流居合の随所に、「現代剣道」の影響が見られるのはその名残であろうと思う。これは、明確に区別する必要がある、それぞれの技術・理論を混同させては真の術に到達することはできない。なぜなら、その目指すところがまるで違うからである。

ではその「目指すところ」とは何か。

武術の稽古により、身につけようとしている技術とは「速く、自在に動き、敵を制すること」にはかならない。

現代武道のスポーツ的な動きのほうが、古流の型稽古よりよほど速いではないかという人もいることだろう。確かにスポーツの目で見れば、速度については居合の型よりも剣道の打ち込みの方が速く見えることもあるだろう。しかし、それは多分に筋力に頼った「スピード」でしかなく、筋力の衰えとともに、その技も鈍くなるものである。

これに比して、武術本来の動きというものは、人間の身体に最大限の合理性を求めるものであり、稽古内容は年齢・体格・筋力等の違いに左右されることのない「身体活用の真理・本質・可能性の追求」を本道としなければならない。それによって得られるものこそが、普遍的な「強さ」のはずである。これは武術の種類や流派にかかわらず、求めるべき本質と言えるのではないだろうか。

誤解のないように言うておくが、現代剣道（現代武道）を批判するつもりは毛頭ない。それはそれで「武道的スポーツである」と自覚し、精進すればよいのであって、問題があるのは古武道と現代武道の境界線を見ようとしないうこと、あるいは境界線のあることすら気づかないということである。もちろん両者に接点は多く存在するだろう。しかし、違うということを理解しない限り、その接点も見えないはずである。

反対に、今の世の中で古武術と呼ばれるものの中に、身体活用の追求を標榜しているものがどれだけあるかと考えると、非常に寂しい思いをすることも事実である。もちろん今に伝わる英信流についても、ご多分にもれない。

また、巷にあふれる居合のほとんどの技から「武術としての強さ」（単なるパワーとしての暴力的な強さではない）を感じ取ることができないのも、技の本質を踏み外しているからとしか考えられないのである。

繰り返しになるかもしれないが、「演武」というかたちで見られることを強く意識している現代の英信流は、形骸化（様式化）が進み過ぎて古来の技とはおよそ掛け離れたものになっていると想像される。その第一の原因は「想定」の誤認であろう。想定にとらわれすぎ、「型そのものの持つ意味」が置き去りにされてきた結果が、形骸化された現代の居合である。

その一方で、「型」として技が残されている限りその中に古来の技を蘇らせるための鍵が隠されているに違いない、とも思うのである。またそれを信じないことには、この論述もまったく無駄なことになる。

以降、これまでに述べたことの細部について検証していきたい。

〈現代居合道の諸問題〉

具体的な技術論に入る前に、現代の居合道におけるいくつかの問題点について考えてみたいと思う。これは、自分自身が稽古を重ねるに従って浮かんできた種々の疑問についての自分なりの考察であり、

またこれら諸問題について考えることが、古来の武術に近づくための手掛かりとなるはずである。

なお、ここでいう「現代居合」とは制定居合のような歴史の新しいものだけではなく、「古流」として伝承されていながら、明らかに様式化してしまったと思われるものも含めての表現であることをおことわりしておく。

1.論理的指導とは何か

居合の稽古において常々感じていることのひとつに、指導する側の論理的説明の不十分さが挙げられる。

例えば、次のような場合である。

(想定に基づいて)

初心者が正面を向き横一文字に抜き付けたその切先が、体の幅よりも外に出た(開き過ぎた)。このとき指導者は、

「切先をもう少し内側(敵の方)に向けるように」

と言う。

初心者は言われるとおり、抜き付けた状態のままで手首を使って切先を内側に向ける。そして次回からは切先がその位置に止まるように調整しながら抜いてゆく。

初心者を指導する様子は(やや極端ながら)おおよそこのようなパターンではなかろうか。さらに進んで難易度の高い技を習うときも、ほぼ同じようなやりとりがあるだろう。しかし、この指導法には多くの要素が欠けているのである。そのポイントだけを挙げれば、次のようになる。

- ①なぜ切先をその位置で止める必要があるのか
- ②切先が開いてしまったことの原因はどこにあるか
- ③どうすればその原因を取り除けるか

これらのことについての説明が、どうしても不十分になりがちである。

特に、②③における「原因」は人によって千差万別で、指導者はその個人に対して指摘すべき部分を的確にとらえなければならないはずである。

①についてはそれなりの説明のしかたは想像できる。

「切先を敵に向け隙をなくし、反撃を許さないようにするため」

といったものだろう。これも一理ではある。さらに、指導者のなかには事細かに想定・理合を説明し、一つ一つの動作の意味付けをする指導法を実践している人も多くいることだろうと思う。だが実はこの「想定」というものがいちばんやっかいなものである。(このことについては、次項で触れることにする)

とにかく、例に挙げたような指導法からは、結果としての形を得ることはできても、型の本質的な意味を理解することは不可能である。

「この型は、こういうふうにするものだ」という程度の認識しかない指導者も多いのではないだろうか。指導者自身もそういう教わり方しかしていないのであれば、しかたのないことかもしれないが、そこにあるのは「技の手順」だけでしかない。

本人が「何をやっているか」を自覚できない稽古では意味がない。逆に、一つ一つの動きを分析的に説明してもらえば、たとえ初心者であっても自分なりの稽古をすることができるはずである。

目的とそれに達するための方法さえ分かれば、あとは本人の努力次第で上達への道が開かれるのではないだろうか。

指導者は技術を論理的に説明し、教わる側は自らの動作をその論理に当てはめて分析的に自分の稽古をする...つまり初心のうちから客観的な稽古が可能となる。

これが理想ではないかと思う。

2.想定の功罪

現代居合の多くを形骸化に陥れた要因の中で、最も罪深いものは何かと聞かれれば、私は迷わず「想定である」と答えるだろう。

これは、先に述べた「論理的指導」に大きく関わる問題でもある。

居合道を学ぶにおいて「想定」は無くってはならないものである。この事実に関して、まず間違いはないと思う。想定に基づいて初心者は技の具体的なイメージをつくり、型を理解してゆくのである。

では、それほど重要なものをなぜ「最も罪深い」と言わなければならないのか。

問題は想定そのものにあるのではなく、それを理解する人間の方にある。

想定とは一体何であるか、と真剣に考えている居合人が現在どれだけいるだろうか。

「想定とは実戦のシミュレーションである」

大方の意見は、たぶんこのようなものだろう。しかし、全くの素人にこう言ったとすれば、おそらく「それでは、想定にない攻撃を受けたときは、対処できないのですか」と聞かれるに違いない。

それに対し居合道家は、このように答えるのだろう。

「すべての型を習得すれば、どのような攻撃にも対応できるのです」

だが、本当に自信をもってそう断言できる、あるいは実践できる人が、果たして何人いることか。

例えば、こちらが木刀などを手にして、

「自由に打ち込みますので居合の技で制してください」と言ったとしたら

「どうぞ、どこからでもおいでなさい」と受けてくれる人が本当にいるのだろうか。

私自身、修行の過程にある者としては「すべての型を習得すれば...」という言葉信じの方がずいぶんと楽ではある。まして、現代居合において、想定は絶対的な権威と存在感を持っている。これに口を挟むことは、居合そのものにたてつくようなものである。

これは私の推測に過ぎないが、多くの道場において「はじめに想定ありき」といった感覚が根付いており、型における動きそのものが想定 of 支配下にあるのではないだろうか。「型の意味＝想定」といった図式ができあがっており、見えない敵の動きを映像的に見ようとするのを強いられているのが、現代居合の実態ではないかと思う。

いかにして想定に矛盾しない動きを求めるか、ということが稽古の主眼となっている。しかしこのやりかたでは、型の「動作の意味」は決して理解できないはずである。

型に関して本当に考えなければならないことは

「なぜそういう型を作る必要があったのか」

ということである。出発点をそこへ持っていけないことには、武術としての動きの本質を求めることなど、到底できようもない。

求めるべきものは「想定に合った動き」ではなく「その想定を必要とする動きの在り方」である。

前項で例に挙げた「切先の位置」などについても、眼前に敵を想定することがすべてではなく、切先～手首～肩～胸へと、その後続く身体運用に関連づけて説明する必要がある。

また動作によっては、下手をするとパントマイムもどきのことをやっていると思えないうような所作になっている場合も往々にしてある。そこにはないもの（相手）をあたかもあるようにして動かそうとするために、踊りとも武術ともつかない、意味を持たない動作にしかならないのである。

「敵がどこにいるか、どういう体勢でいるかをよく考えてやるように」というような指導は、全くの初心者には技の手順を覚えさせるための「仮の決め事」であり、手順を覚えた後は動きそのものが持つ意味合い、すなわち「型の中の武術的真理」を教えなければならないはずである。

あえて結論めいた言い方をすれば、

「想定とは型を修得するための、初期段階での通過点でしかなく、それにこだわり続けることは技術的進展の妨げにしかならない」

というところであろうか。

そういうふうにと考えると、技そのものに対する価値観が大きく変わってくるはずだ。

当然のことながら「理合」のとらえ方も全く違ったものになるだろう。

「想定」の存在意義をどうとらえるかによって、スタートラインの位置や方向がまるで違ってくるといふことをよく知る必要があるのではないだろうか。

3.精神力と技術の関係

気合を入れる。

気迫を込める。

気で押す。

似たような言葉が武道一般によく聞かれることだと思う。

「相手に向かう気持ちを込めて」

という意味で「気」という言葉を使うのだろう（ただし合気道や気功術等で用いる場合は、具体的な技術論に近くなると思える）。

居合を学ぶにあたり、初心者の中には「気迫」を出すために

「大きく、思い切りよく刀を振るように」

と指導されることが多い。勢いよく刀を扱うところから始め、慣れるに従って無駄な力を抜いて行くというやりかたである。しかし、日常の動作から考えても、必要以上に力を入れることは簡単だが、不必要な力を抜くということはそう易々とできるものではない。

最初に力を入れて振ることを覚えてしまっただけでは、後から力を抜けと言われても難しいはずである。無駄な力を使わないことが技の冴えにつながるのであれば、初めから必要最小限の力の使い方を学ぶべきであろう。

「床をたたく位の方がよい」と、打ち下ろしについて言われることがあるが、私は床をたたくことは単なる技術的不備であって、気迫や鋭さとは次元の違う問題であると思っている。

気に関しては

「気位をもって敵を制することこそ、居合修行の最終目標である」

というような言葉もよく聞く。これを受けて、初心者に対し

「向かってくる相手を気で制しながら、後の先で抜き付け云々...」

という指導をしているとすれば、これは全くの本末転倒であると言える。なぜならば、気や気位というのは、完成された技術の副産物として生じるべきものであって、技の未熟な者がいくら気を込めたつもりになってみても、おそらく相手には一切通じないはずである。それどころか、かえって余分な所に力が入り、動きが鈍ることにもなりかねない。

居合の稽古ではほとんどの場合目に見える相手がいない。このことは「気」というものの解釈にも大きく影響しているのではないだろうか。

少し考え方を広げれば、相手に対し一切隙のない構えを取ることができたとしたら、それこそが「気で相手を制する」ことなのではないか。先に「完成された技術の副産物」という表現を使ったが、むしろ気とは純然たる技術そのものであるとも言える。精神力を、単なる集中力や意気込に置き換えてしまっただけでは、逆に技術的進展の妨げになる可能性もある。

技を練ることによって隙のない身体を作り、そこから生まれる気持ちのゆとりが何事にも動じない精神力、集中力へと発展することを技術習得の最終目標と考えてはどうだろうか。

4.集中力とは何か

前項に続き、精神面についてもう一点だけ触れておきたい。

他人に「居合道をやっています」と言ったとき、

「精神修養ですね」

「集中力が養われるでしょう」

というふうに戻されることが、よくある。

何よりも「居合」というものがどんなものか見たこともない、あるいは偏った知識しか持っていない人が大多数なので無理もないが、他の武道（空手、剣道、柔道など）と比べて実戦的なイメージとは程遠いようである。

居合の修行によって精神力が養われ、またその稽古に集中力を必要とすることは言うまでもないことだが、ここで経験のない人が言う「集中力」は、武術本来の持つべき集中力とは少し違うということを知っておかなければならない。

空手家、時津賢児師範の著書『武道の方法叙説』の中に「拡散的意識・拡散的視覚」という言葉がある。この言葉が武道における集中力のすべてを表現していると思えるので、私論をはさむ余地はほとんどない。

この考え方を私なりに表現すると

武術に必要な集中力とは、ある一点に意識・視覚を集中させることや、周囲が見えなくなるほど何かに没頭するようなことではなく、意識も視覚もでき得る限り広く保ち、そのあらゆる部分を均等に認識する拡散型のものである

といったところだろうか。

拡散的な意識、視覚をまとめて「拡散的集中力」と言ってもよいだろう。

これは考えてみれば当たり前のことで、目の前にいる敵の姿にだけ集中して、攻撃を制していても、横から出てきた第三者に気づかず斬られてしまったのでは何にもならないというようなことである（実際はこんなに単純なことではないが）。

居合の稽古において「遠山の目付」といわれるのが、まさにこの「拡散的集中力」といえる。どこを見るでもなく、しかし視界に入る全てを均等に見るのが「遠山の目付」であり、決して遠くにある山を「見つめる」ことではない。一点を凝視するような視線は、実戦の場では即、死につながる。これは構えに入るときだけでなく、技が始まってから終わるまでのどの部分においても同じことである。従って武術経験のない人に居合の演武を見られて、

「集中力がこちらにも伝わってきました」

などと言われたとしたら、武術家としては自らの未熟を恥じなければならないということにもなる。

（この問題については、「目付け」というものの解釈のしかたにもかかわってくる）

スポーツにおいても一流と呼ばれる選手にはこの「拡散的集中力」が備わっているのだろう。一瞬の判断が的確にできるというのは、そういうことであると思う。

5.「正座」の武術的解釈

無双直伝英信流を学ぶにあたって、初めに習うのは「正座の部」の技である。もちろん礼式その他、技に入る前に学ぶことも多くあるが、技に関してはすべての基本として、まず「正座の部・前（初発刀）」を稽古する。

周知のとおり、この正座の部は大森流という別の流れの技であったが、今日では完全に英信流の技術体系に取り入れられている。

聞くとところによれば、大森流は新陰流の剣術に小笠原流（一説では伊勢流）の礼法を取り入れて作られたものだという。

大森流が成立した江戸期の日本には畳文化が定着しつつあり、それ以前の戦場を想定した剣技と比べると少し性質の違うものであることは容易に想像される。このことは居合について考える際、最も慎重に捕らえなければいけない要素の一つであろう。

大森流の他にも正座の状態からの抜刀を伝える流派は多くあるが、現代において武術家の間で論議の絶えないのが、この「正座での帯刀」についてである。

時代劇を見ただけでもわかるように、正座での帯刀（しかも大刀だけ）という姿は実に不自然である。

当時の日常生活において正座をするというのは、まず畳の上に限られると言ってもよいだろう。平和

な時代に自分の家の中で帯刀していることはまず考えられないし、まして他人の家や城中などにおいては、なおさらあり得ないことである。

さらに言えば、技の想定にあるような「互いに正座帯刀の状態と敵と対峙している」というような状況は、あまりにも非現実的である。

この問題については既に多くの研究家の方々が諸説を唱えていらっしやるので、ここでの細かい検討は省略するが、「正座帯刀」の解釈のしかたとしてはおよそ次のような例が挙げられるだろう。

①作法・たしなみとしての刀法

これは「時代背景に伴い、実戦における刀法を必要としなくなった武家社会において、それでも武士のたしなみとして刀の抜き差しを心得ておくべきである」という考えに基づき、屋敷内でも稽古できるように取り入れられたもの」という意見である。

②鍛練のための正座

正座の状態であまり長くいるというのは足にかなりの負担がかかるもの（特に現代人にとっては）であり、体勢を変化させることが難しい。

また、立ち座りを繰り返しながら抜刀することによって、足腰が鍛えられるという考え方である。

③立業の為の正座

これは②と重なる部分もあるが、要するに「正座という不利な体勢において抜刀を稽古しておけば、体の自由が利く立った状態での抜刀は容易にできるようになる」ということである。（この意見は立膝にもあてはまる）

④礼儀としての正座

自分より目上の人間の前で居合の演武を行う際、または神前に奉納する場合に、立った状態のままでは失礼にあたるというところから、正座の技が考案されたとする説。

以上のような考え方が、この「正座の居合」に対する代表的なものではないかと思う。

各説要点のみを挙げたので言葉足らずのところが多々あるが、いずれにせよ「どれが正解」というようなものではなく、正座の居合の成立過程にはすべての説がわずかずつでも当てはまるのではないだろうか。

ここで考えてみたいのが「正座居合の武術的必要性」についてである。

振武館・黒田鉄山師範によれば、正座と居合膝（立膝）では全く技の性質が異なるということだが、それでは（私の知る限り）民弥流には存在しない正座の技は、武術的には何の意味も持たないのであるうか。

現代に伝わる諸流派の技から武術的身体運用が失われ、その形骸化が進んできたことは否めないが、正座の技が古くから存在したということも紛れもない事実である。

先述の①～④説を含め、何らかの必要性、必然性があってこそ正座の技が生まれたと考えれば、その中に居合膝からの抜刀とは異なった術理が存在してもよいはずだ。

個人的には②③説を踏まえたうえで、次のように考えたい。

立膝からの抜刀は民弥流に見られるように浮身を使った身体運用で、立った状態の相手に対してより有利な体勢を作ることが可能になるが、正座の場合は淀みない体重移動が困難であり、より精妙な身体運用が求められるものであろう。従って、一般的に行われているような、基本技としてではなく、立業・立膝を学んだうえで研究されるべき究極の技術が「正座の居合」である。正座の姿勢から、気配なく動ける技術を得られて初めて、その存在意義に答えが出せると言える。

異論は多々あるに違いないが、正座からの抜刀を武術の技として受け継いでいくからには、このような考え方がないのでは、と思う。

基本として正座居合を教え、習うのは悪いとは言えないが、それならば立膝・立業を習得した後に、正座の技についてもうひとつ上の次元での分析・研究がなされなければ、ますます技の形骸化は進むであろう。

英信流修行者は、正座居合の存在をもっと深刻にとらえなくてはならないはずである。

補足

英信流の祖、長谷川主税助英信は元来柔術を得手とした人物であつたらしいので、正座や立膝からの抜刀と柔術の関係も、今後考察の必要がある。

6.右手で抜かない、ということ

「居合の生命は抜き付けの第一刀である」と言われる。これはまさしくその通りであると思う。その第一刀に求められる技術こそが、居合の本質と言ってもよいくらいである。それだけに、稽古の中でよほどの意識をしないことには、その本質に一步たりとも近づくことはできない。

居合の抜刀において、左手の有用性を説かれることは多い。鞘引きの利いた抜き付けは見ていても鋭さが伝わってくる。しかしこの「鞘引き」を単に抜刀のための補助動作としてしか認識していないとすれば、それ以上の技術的進展は望むべくもないだろう。この左手の引きこそが、居合なのである。

全くの初心者が、帯刀した状態から刀を抜く場合、その動作のほとんどを右手だけで終えてしまう。もしその目前に敵がいたらどうなるだろう。

右手だけで抜くには、刀はあまりにも長い。そのため、非常に窮屈な体勢で無理をしながら抜くことになる。敵から見ればまさに隙だらけで、いくらでも攻めようがある。

柄にかけた右手でそのまま刀を抜いていくのは、あたりまえすぎる動作である。

この抜き方でも幾度も繰り返して練習すれば、それなりの速度を伴った、一見すると技らしきものになるかもしれない。しかしいくら速くできるようになったとしても、技の本質が変わるわけではない。動態視力や反射神経の優れた相手に対しては、やはり通じないことになる。腕力に頼った早抜きでは、限界はすぐに見えてくるはずだ。

要は抜いて行く過程が相手にわからず、かつ速ければよい。そこで必要になるのが左手の働きであり、体捌きである。細かく言えばつま先から膝、腰、胸、肩、肘といった体の各部に加え、体の中心軸や重心の置き方に至るまで身体のすべての要素やそれに対する意識が個々に働きあって、抜刀を完成するということである。

各部をそれぞれに働かせ、結果として刀を変化させるのが居合術、抜刀術である。その為に「型」は存在するのであり、決して実戦のシミュレーションではない、ということだ。先述のように、想定というもののとらえ方を間違えれば、右手を使うことに疑問を抱くような感覚とも無縁になってくる。

「目に見えない相手（仮想敵）こそ最強である」という意識がないかぎり、型はその型の中にしか存在意義を持たないことになってしまう。

ただ右手の使い方一つだけにでも問題意識を持っていれば、他の部位の働きもいくらかは必然的に問題として浮き出てくるに違いない。

右利きの人間は特に、日常生活において酷使している右の手に、せめて居合の稽古の時だけでも楽をさせてやるという気持ちになってみれば、その瞬間から「あるべき姿」が見えてくるのではないだろうか。

7.足捌きについて

この項より、居合道と剣道の関係について、少し考えてみたい。

現代剣道の存在が居合に深い影響を与えている部分があることは既に触れたが、ここではまず足の使

い方に的を絞ってみたいと思う。

私が指導されてきた英信流では、打ち下ろしたときなど左右の足のつま先は同じ方向（前方）に向いていることが原則とされている。真向に斬るときはもちろんこれで問題ないと思うが、袈裟斬りなど半身の技の場合にも、後ろになる足のつま先が前方に向く状態にすることに少々疑問を感じるのである。

剣道の足捌きは、ほとんどの場合これと同じようになっており、前後左右への直線的な動きに対応するものである。主に瞬発力に頼った動きにならざるを得ず、多分にスポーツ的要素が含まれている。

居合においてこの足捌きを用いた場合、斬っていく方向にのみ力や体重がかかることになり、その次の変化に余計な力を要することになる。何よりも前項で述べた左手を中心とした抜刀を完成させるためには、下半身を基準に体を開いた状態、いわゆる四股立ちの体勢をとる必要がある。

現代に伝わる英信流の底辺を広げたのが剣道家たちであったことは、はじめにも触れた。土佐の地で永く育まれてきた古流武術を全国的規模で普及させた功績は計り知れないが、一方でその本質を希釈してしまったことも事実ではないだろうか。

特にここで言う足捌きに関しては、古流の技をスポーツの領域に引きずり込んでしまった可能性は否定できない。

私は当時の剣道を見たわけでもなく、まして現代の剣道を批判できるような立場でもない。しかし現代居合に対する疑問を論じる上で、剣道との差別化を避けて通るわけにもいかず、非礼を承知で述べさせていただくことにする。

剣道に必要とされる動きは、多くの場合瞬発力によるものである。当然のことながら相手との間合いや、仕掛けるタイミングによって技が極まるのだが、その土台となるのは筋力であることは間違いない。

私自信子供のころに五年ほど剣道を続けていたが、毎回終わるころには汗だくでヘトヘトになったものである。

剣道の場合（面、小手、胴などの）ポイントをはずれていれば、いくら強く打ち込まれようが有効打にはならない。したがって「肉を斬らせて骨を断つ」というようなことが平気で行えるわけだが、真剣を手にしての立ち合いを想定すれば、決して同じような真似はできない。

甲冑で身を固めていない限り、指先であろうが肩口であろうが、刀は触れれば切れるのである。スピードと力だけに頼り、結果として相手に勝ったにしても、自らも深く傷ついてしまったのでは意味がない。逆に相手の攻撃をどこにも受けずにいられさえすれば、こちらの勝ちも同然である。そのために「居着かない身体」を求めるのが武術の道であり、スポーツとしての剣道と決定的に違うところであろう。

筋力に頼らず自在に動く身体を作るためには、体重の殺し方や重心の置き方をよく研究する必要がある。

普段の生活の中で立ったり歩いたりするときに、自分の体重の移動の仕方と筋肉の使い方をよく観察するのも稽古のヒントになるだろう。そうやって日々自らの身体を意識していると、スポーツ的な動きが武術にとっていかに不便なものかが解ってくるはずである。古流武術の確立した当時の人々は、現代の日本人とは全く違う身体運用を身につけていたと言われる。「ナンバ」とよばれる歩き方について、半身から半身へと身体を捻らず使うものであることはよく知られているが、現代の柔道や剣道にはその面影すらほとんど見えない。

現代人がむやみにナンバで歩こうとして手足の出し方を変えてみたところで、まず出来損ないのロボットのようなぎこちない動きにしかならないはずだ。実際にやってみるとよく分かるが、重心を移動させることによって身体を動かすという意識が必要になってくるし、歩く際に手を振ることもだんだんなくなってくる。

前述の四股立ちや、撞木の足（前の足を前方に向けるのに対し、後ろの足を九〇度に近い角度で外へ開く）など、一般的に古流の足捌きとされているものが今の英信流にはほとんど見られないが、古来の日本人の身体運用から考えて、これらのことだけでも検討し直せば、筋力とは別の次元の速さがそこに見えてくるような気がするのだが、どうだろうか。

8.踏ん張る足、踏ん張らない足～安定とは何か

足の使い方についても一つ考えなければいけないことがある。

前項の内容と重なってくるが、足の置き方と安定性についてである。

私が学んできた英信流では、前後になる足が決して同一直線上には並ばないことが鉄則とされている。これは剣道の立ち方から見れば当然のことで、同じように前に向いている二つの足を一直線に並べてしまえば、横からの力に対して非常に弱くなる。いくら腰を落としても、少しの力で左右のバランスを崩されてしまうことになる。

一方前述の四股立ち・撞木の足の姿勢になると、これが全く逆になる。つまり同一直線上に足を置かないと、どうしてもバランスが取れなくなってしまうのだ。

さらに、英信流では立業で打ち下ろしたときなど、後ろになる足の膝を完全に伸ばすことが要求される。丁度つかえ棒のような状態にするのである。加えて腰を落とすことで安定を保つ。前になる足は膝を九〇度近く曲げるのだが、要するに前後の足で踏ん張りをかけて腰から下を盤石にするということだ。

逆に四股立ち・撞木の足では、しっかりと腰を落とすことには変わらないが、こちらは極力足を踏ん張ることなく、下半身を柔らかく保つことが必要になる。撞木の足では、前者同様に膝を伸ばして立つこともできるが、そうしてしまうと最も大事なことが失われることになる。最も大事なことは「変化への対応」である。

居合に限らず全ての武術に共通して求められるのが「居着かない身体」であることは前にも述べたが、「安定し、かつ居着かない」ことを求めるとすれば、筋力に頼ったつかえ棒にはどうしても問題点が見えてくる。

押しても引いても微動だにしない、そういうことだけを「安定」と理解するなら、居着かない身体は「不安定の極致」ということになり、相反する概念になってしまう。

昔の達人の逸話の中には、自然体で立っているだけなのに、別の人間がいくら力強く押しても全く動かなかった、というようなものがあるようだが、これは重心の使い方そのものが技になっている例と言えるだろう。身体を支える支点が、足の裏でなくほかの所にあるような状態であろうと想像される。

私自身はとてもそんな真似はできないが、そういうことをイメージして稽古をすることくらいならできる。意識に身体が追いつくには、一体どれだけの時間を要するのか見当もつかないが、せめて意識だけでも高い次元に置いておかenないことには、技術的進展も望めないと思っている。

9. 打ち込み・打ち下ろし

剣道ばかり引き合いにして申し訳ないと思うが、最後にもう一つだけ述べておきたいことがある。

初心者の頃に、刀の打ち下ろしについて「刀が敵に当たるときに力のピークがくるように」というようなことを言われた覚えがある。つまり自分と同じ体格の相手を想定して、その頭部に物打が到達するときに、最も強い力がかかるようにするということだ。

一見まともに聞こえるが、これもよく考えれば問題がある。

剣道においては「打ち込み」という言葉がよく使われる。文字通り「打つ」のであって「斬る」のではない。これは剣道の競技としての性質上、当然のことである。相手にダメージを負わせることなく、ポイントを奪うことにその目的があるからだ。

美しい姿勢での確な打突を決めるには、当てるべき部分に竹刀が届く瞬間に力を集約する必要がある。

これをそのまま居合の「打ち下ろし」（斬り下ろしと言った方がよいか？）に当てはめると、初心者のときに教えられた通りのことになる。

最終的にはヘソの高さまで刀を下ろすのだから、力のピークのあとは、言わばフォロースルーにあたることになる。しかし本当にそれでよいのだろうか。

試し斬りや据物斬りならそれでよいのかもしれないが、居合においては想定の手を少しも抜けられない技になってしまう。敵がそこにいてくれなければ、十分な斬撃にはならないことになるのだ。

稽古の中で「刀の反りを意識して振るように」と言われることがあるが、これは非常に分かりやすく、よい言葉であると思う。しかしこの意識と剣道式の「打ち込み」とは相容れないものではないだろうか。

反りを意識するというのは「引き斬り」の概念である。

竹刀と刀の決定的な違いは反りの有無であろう。日本刀が世界最高水準の刃物であることの大きな理由の一つは、この反りにあると言える。

刀を真下に引き下ろすだけで引き斬りの状態になる、これが日本刀の真骨頂である。だとすれば、切っ先を遠くへ飛ばすようにしながらの「打ち込み」は刀の持つ優れた機能性を殺していることになる。

反りを十分に活かした打ち下ろしであれば、斬り始めてから斬り終わるまで、どの時点で敵に触れても、その斬撃力に差異はなくなる。逆に刀の運動にピークを作ってしまうと、その瞬間を外されれば攻撃力は著しく低下するはずだ。

定められた打突点への攻撃のみが有効とされる剣道とは、決して技術論を同じくすることはできないのである。

「剣道と居合は車の両輪」と例えられることは多い。観念的な言葉は、油断して聞くと無条件に納得させられてしまいがちであるが、形も素材も違う車輪ではまともに走ることはかなり困難だろう。

(剣術と居合は両輪と言えるかもしれないが)

10. アナログからデジタルへ～武術における身体の記号化

「アナログ・デジタル」とは便利な言葉で、世の中の多くの事象についてその特性を区分する場合の表現としてよく利用されている。

まず私なりの結論から言ってしまう。

「武術とは、身体デジタル化（記号化）である」

これは単なるイメージとしての表現ではなく、理論的にもまた私の実感としてもこう言わざるを得ないのである。

甲野善紀師範がかつて武術的身体運用について「多方向多要素同時運行（あるいは多方向異速度同時運行）」というような言葉を使って説明されていたが、私にはこれこそ「身体記号化」という考え方なのではないかと思える。

状況に応じて自在に身体を操るためには、高度に記号化された身体運用理論とその実践（稽古）が必要になる。

既述のような右手を使わない抜刀法や、重心の移動の仕方、打ち下ろしに至るまで、居合の技術は身体記号化を実感して初めて「術」と呼べるものになるはずだ。

身体各部をより細かく分割して意識し、またそれらを同時に別の働きを持って作用させた結果が「技」なのであろう。

ここで改めて「型」というものを見直しておきたい。

居合における「型」とは、想定に頼った実践のシミュレーションではないということは既に述べてきたが、ここでさらに「型」というもののあり方がはっきりしてきたように思う。すなわち、「型」とは武術的身体運用を習得するべく、記号化された身体を作る為の鋳型である、ということだ。

残念ながら今の英信流の型からは、そのエッセンスがかなり抜け落ちているように思わざるを得ない。そこで、いま我々がやらなければいけないことは、伝えられてきたものをただ黙って受け入れるのではなく、論理的な問題意識をそこにぶつけて見ることであると思う。

もちろん今の英信流の技術体系にも納得できる部分は幾つもあるが、それとても問題意識を持って初めて分かることであり、まず捉ええ方の根本つまり基本概念を、自分なりにしっかりと見つめ直すことが先決であらう。

イメージという言葉は稽古のなかでよく使うが、これは基本概念がしっかりしていなければ、非常に誤解を招きやすい言葉である。

デジタル化された（理論的な）言葉の手助けとして使われる「イメージ」であればよいが、そうでない限りは技術の習得が単に雰囲気的なものになってしまい、よりどころを失う結果になってしまう（言ってみればこれがアナログ化であらうか）。

甲野師範がおっしゃる「できねば無意味」という言葉の意味をよく考える必要があるだろう。

身体各部がそれぞれやるべき仕事をし、しかも始めから終わりまでその仕事が完璧であるものだけが「術」と呼ばれるべき質を得るのである。

要するに 0 点か 100 点かしかないということだ。

0 と 1 だけですべてを処理するコンピュータのデジタル感覚を理解できなければ、居合は踊りにもならないのではないだろうか

〈古式居合術・基本術理〉

ここでは、既述の概念に基づいて英信流の技の記号化を考えてみたい。

これは私自身を納得させるための私なりの術理であって、今後大きく変容し、より高度なものにしてゆく必要があるが、まずその叩き台と考えて頂きたい。

英信流の技一つ一つについての具体的な検討は後に行うつもりだが、まずすべての基本となる身体運用法について述べることにする。

1. 固定原理

身体の一部あるいは刀身を、空間または自らの身体（主に上体）に対して位置的固定 をすることにより居合における「体捌き」を導くことを総称して「固定原理」と言う。空間における固定を「空間固定」、身体に対しての固定を「相対固定」と称し、以下に説明をする。

この固定原理は、全身の活用（体捌き）による「手に頼らない、結果としての抜き」を実現するためのものである。（将来的にはすべての固定をなくす方向へ進まなければならないが、そのための第一段階と言ってよいだろう）

また、この理屈は体術にも応用ができ、現代の日常的な身体運用とは違う質の働きを 求めることで、力を使わず直接的に相手の身体に術を作用させるための理論にもなり 得るのではないかと考えている。

◎空間固定

（イ）

主に抜き付けの際、鯉口を握る左手を正中線上に移動させ、その位置で空間に対して 固定し（つまり座標を変えずに）、その左手の位置に腰を移動させる（腰を上げる）こと により結果としての鞘引を完成させる。

（ロ）

柄にかけた右手の位置を空間に対して固定し、左手の鞘引きと左半身を後方へ送る（開く） ことにより、結果としての抜き出しを行う。

（ハ）

状況に応じ、身体各部を空間に対して位置固定することにより、固定していない部分を使っ
ての自発的な体捌きを促す。

《注》

（イ）と（ロ）は当然のことながら同時には行えない。それぞれ次の「相対固定」と合わせるこ
とにより、抜きするものである。

◎相対固定

（ニ）

抜付の際、正中線上で柄にかけた右手の位置を自らの上体に対して固定し、空間固定（イ）を同時に行
うことにより刀を抜く。つまり右手は空間上を身体と同時に移動するが、前方には送らない。

（ホ）

状況に応じ、主に左右の手（腕）を身体に対して位置固定することにより、固定していない部分を使っ
ての自発的な体捌きを促す。

◎平面固定

切先、柄、腰、手など、各部を空間の同一平面上で移動させることを「平面固定」という。
平面移動のことを「固定」と称するのは表現としてはおかしいが、空間固定・相対固定を含め、用語としての統一をはかるためにあえてこう呼ぶことにする。

◎支点の空間固定

空間上の一点に支点を置き、その固定された支点の上で身体または刀身を滑らせるように移動させることによって、身体（刀身）の居付きをなくすことを「支点の空間固定」と称する。

2.基本変化

固定原理と併せ、技を行うための身体移動（変化）の方法を以下に記す。
これは予備動作なしで動くための技術であり、主に四肢の脱力をきっかけにして身体の変化を促す。位置エネルギーを運動エネルギーに転換すると考えれば分かりやすい。

◎沈み

足を前後に開いて立った状態(体重は、やや前より)から、前の足の膝から下の緊張を瞬時に緩め、身体に沈みをかけることを、単に「沈み」と呼ぶ（後ろに体重をかける場合も同じ）。
前後に体を入れ替えるときや、脛囲いからの振りかぶりをはじめ、身体を変化させるすべての動きに必要な動作である。



※「沈み」についてはさらに進展あり。初めから前体重にした状態では一方向の変化には有効だが、全方位への自在な変化が得られるとは言い難い。
初期状態では重心を両足の中間に置き、次に述べる「胸の抜き」を利用しながら体重を移動させれば、より柔らかく、速く身体を変化させられる。
術理としては「胸の抜き」に統合されることになるかもしれない。



いかなる体勢にあっても中間重心を保てるように体を使うことが、質的に速い体捌きを実現するための基礎になるのではないと思う。
「両足に均一に体重を乗せること」ではなく「どちらの足にも体重がかからない状態」を体感できるよう、体中にセンサーを備えるつもりで、デリケートな稽古をすることが大切であろう。

◎胸の抜き

胸の緊張感を瞬時に緩めると身体各部にその弛緩が伝わる。これを「胸の抜き」と呼ぶことにする。
沈みをはじめ、身体の変化を行うためには四肢の緊張を解く必要がある。これは筋力を使わず動くことにより、予備動作のない変化を実現するための必須条件と言えるだろう。
息を吸い込んで止めた状態で、鼻から少し息を吐いてみると、胸の抜きを実感しやすい。
もう少し観念的に言うと、胸を細い糸で（背中越しに）天井から吊っている様子を想像し、息を抜くことによってこの糸を切り、胸が自由落下するような感じをつかむようにする、ということである。糸が切れた瞬間には、四肢の緊張が解け、わずかの体重移動でむだのない変化が行える。
「胸の抜き」はすべての動きのきっかけになるものである。
また、居合における呼吸のとりかたにも関連してくるものである。

ここまでで、概論編を一応終えることにするが、自分自身の浅学菲才を省みず、解ったようなことばかり述べてきたことをお許し頂きたい。

重ねて言うが、この論述は私自信を納得させるためのものであり、決して他人に向けたものではない。

ただし書いた内容については、もちろん責任を負うつもりではある。

今後も自らの修行・研究を進め、英信流の個別の技についての私的技術論をまとめられるときが来ることを願ひ精進したいと思っている。

以上